

学術情報

第2回 学内病理談話会

期 日：昭和61年4月19日(土) 午後1:00

会 場：東京女子医科大学 中央校舎1階会議室

開会の辞 武石 詢

平山 章 座長(病院病理)

1. 卵巣中胚葉性混合腫瘍の2例
滝沢 憲・楊 瑞銘・井口登美子・武田 佳彦(産婦人科)
後藤真喜子・大川 智彦・池田 道雄(放射線科)
金田 良夫・武石 詢(第一病理)
相羽 元彦・平山 章(病院病理)
 2. 大腸癌の初期像について 五十嵐達紀・長廻 紘・鈴木 博孝・浜野 恭一(消化器病センター)
 3. 外耳道色素性母斑の2症例 高山 幹子・石井 純子・石井 哲夫(耳鼻咽喉科)
 4. 一部にglomangiosarcomaの組織像を呈したglomus tumorの1例
相羽 元彦・張ヶ谷健一・倉持 茂・藤盛 孝博・平山 章(病院病理)
太田 信夫(中野江古田病院整形外科)
- 伊藤 克己 座長(腎センター小児科)
5. Cationic probeを用いた腎糸球体陰性荷電の電顕的観察
長田 道夫・川口 洋・山口 裕・伊藤 克己(腎センター小児科)
 6. 糸球体内に大量のコラーゲン線維の沈着を認めたネフローゼ症候群の1例
佐中 孜・山口 裕・松村 治・菊池 典子
樋口千恵子・向後 初美・堀田 茂・杉野 信博(腎センター内科)
岡田 正明(国立病院医療センター病理)
 7. Oculo-Renal syndromeの腎生検について
久保 長生 座長(脳神経外科)
中尾 尚之(腎センター内科)
 8. MedulloblastomaのGFAP・Neurofilamentによる免疫組織学的研究
遠山 隆・久保 長生・氷室 博・井上 憲夫・田鹿 安彦
田鹿 妙子・坂入 光彦・喜多村孝一(脳神経外科)
 9. 側頭葉てんかんにみられたsmall cryptic tumor (microtumor)の1例
井出 光信・山本 昌昭・神保 実(第二病院脳神経外科)
久保 長生・喜多村孝一(脳神経外科)
 10. 迅速Golgi法によるヒト大脳半球第4野錐体細胞の加齢変化 渡辺 弘美・丸山 勝一(神経内科)
井上 雅彦 座長(第一内科)
 11. 間質性肺炎を合併した多発性筋炎の2例
谷口 敦夫・渡辺 富博・西岡久寿樹(リウマチ痛風センター)
川嶋 朗・長田真理子・西川 恵(腎センター内科)
 12. 原発性肺高血圧症の剖検例について
藤波 睦代・森本紳一郎・西川 俊郎・佐藤 昭人・梶田 昭(第二病理)
 13. 嚢状動脈瘤の迷入を伴った先天性と思われる食道気管支瘻の1例
杉村 雅秀・和田 寿郎(胸部外科)
武石 詢・豊田 智里・金田 良夫・岩崎 智彦・寺岡 邦彦(第一病理)
中沢 速和(腎センター外科)

笠島 武 座長 (第二病理)

14. 小児結節性硬化症の生検皮膚の病理組織学的検討

齋藤加代子・原 美智子・岡田 典子・福山 幸夫 (小児科)
豊田 充康・笠島 武・梶田 昭 (第二病理)

15. 回盲部の X 線解剖よりみた生体における正常所見の考え方

石原 純一・木口 富恵・鈴木 葉子 (第二病院放射線科)

16. Phenobarbital の鶏胚における催心奇形性の検討

西川 俊郎・梶田 昭 (第二病理)

金井 孝夫 (実験動物中央施設)

17. 剖検例500例における Kinetic cell death の発生頻度

寺岡 邦彦・武石 詢・豊田 智里・金田 良夫・岩崎 智彦 (第一病理)
金子 昇 (心研内科)

閉会の辞 豊田 智里

1. 卵巢中胚葉性混合腫瘍の 2 例

(産婦人科) 滝沢 憲・楊 端銘・
井口登美子・武田 佳彦

(放射線科)

後藤真喜子・大川 智彦・池田 道雄
(第一病理学) 金田 良夫・武石 詢
(病院病理科) 相羽 元彦・平山 章

我々は、極めて稀で、予後が著しく不良な卵巣原発の中胚葉性混合腫瘍 (MMT) を 2 例経験した。1 例は 65 歳 OGOP で 45 歳に子宮筋腫で腹式子宮全摘術を受けている。もう 1 例も 67 歳 OGOP で 52 歳に子宮腔上部切断術を受けていた。2 例とも成人頭大の骨盤内腫瘍があり、その表面に S 状結腸・回腸などが癒着した進行期 III 期の原発性卵巣癌で試験開腹術におわった。1 例目は試験切除標本からは未分化腺癌とされたが、剖検摘出卵巣を検討した結果未分化腺癌と未分化肉腫より成る MMT と診断した。上皮成分は異型性の強い細胞が腺腔を形成していたが、非上皮成分は小型で紡錘型をした細胞を主とし、異型性が極めて強かった。2 例目の上皮成分は、CA125 染色陽性で、腺腔状、シート状、乳頭状及び孤立散在性に存在しており、類内膜癌と未分化腺癌の混在型とした。非上皮成分は、Vimentin, Myoglobin 染色陰性であり、未分化肉腫とした。以上 2 例の臨床像、病理所見を供覧する。

2. 大腸癌の初期像について

(消化器病センター外科)

○五十嵐達紀・長廻 紘・
鈴木 博孝・浜野 恭一

大腸癌の発生母地を検索するためには、その微小病変を検討する必要がある。そこで、1983 年より 2 年間の大腸癌切除標本に 1% アルシャン・ブルー染色を行

ない、非癌部を詳細に観察し、10mm 未満の病変を拾い上げ、内視鏡的ポリペクトミーにて得られた標本と対比した。切除標本よりの 10mm 未満の病変は 16 病巣で、ポリペクトミーは 35 病巣であり、以下の結果を得た。①大腸癌の初期像は、無茎隆起性病変もしくは陥凹性病変が大部分を占め、その 1/3 が sm 癌であることより、極く初期の病変のうちに深部浸潤することが示唆された。②最大径が 5mm 未満の病変があった。③腺腫を合併しない de novo cancer と思われる病変が 5 個認められた。

3. 外耳道色素性母斑の 2 症例

(耳鼻咽喉科)

○高山 幹子・石井 純子・石井 哲夫

色素性母斑は良性腫瘍であり、腫瘍細胞としての母斑細胞はその原基として neural crest であるとされている。これは neural crest から melanocyte と schwann 細胞に分化する際の中間の未分化な細胞に相当する。

外耳道に発生する色素性母斑はまれであり悪性化するものもある。我々は外耳道に発生した色素性母斑の 2 症例を経験したので報告する。

症例は 25 歳の女性と 50 歳の男性でいずれも右外耳道入口部に黒褐色の表面に凹凸のある弾性硬の腫瘍を認めた。腫瘍は全身麻酔下に切除を行なった。

病理組織学的には、ヘマトキシリン・エオジン染色で真皮内に浸潤性にメラニンを含んだ母斑細胞を認めた。さらに Fontana-Masson 染色でメラニンが黒く染色されることを確認し、鍍銀染色では黒く染った膠原線維を認めこの線維に囲まれた母斑細胞の分布状態も観察された。